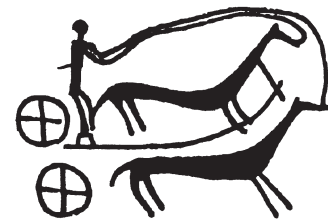


# ニューズレター

Hokkaido University  
Institute for the Advancement of Higher Education

北海道大学 高等教育推進機構  
Newsletter No. 91



教育総長賞受賞者の授業から (4 ページ)

アカデミックサポートセンター新メンバー (7 ページ)

トレセンの年間利用者 3 万人超え (14 ページ)

北大生のキャリア意識に関するアンケート (15 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

## 巻頭言 FOREWORD

### アカデミック・サポートセンターの 3 年間

高等教育推進機構アカデミック・サポートセンター長 農学研究院教授 川端 潤

アカデミック・サポートセンター (ASC) は、高等教育推進機構教育支援部のもとに平成 22 年 10 月に正式発足しました。その前身であるアカデミック・サポート推進室 (平成 21 年 10 月開設) の時代も含めると、この秋で 3 年間の活動を行ってきたこととなります。

ASC は、総合入試制度により理系・文系という大きなくくりで入学してきた学生に対して、1 年後の学部学科移行にそなえた各学科の情報提供と進路選択に際しての相談、疑問解決窓口の役割と、それとともに多様化する入学生の学力向上の補助としての学習サポートを主要な業務として設立されたものです。現在は常勤スタッフ (特定専門職員、全員学

位取得者) 6 名が、アカデミック・ナビゲーター (進路選択支援機能)、アカデミック・インストラクター (学習支援機能)、アカデミック・アナリスト (データ分析機能) という大きな 3 つの役割を分担し、兼任教員であるセンター長およびアカデミック・アドバイザー 3 名の協力のもとに業務を行っています。

## 進路・修学相談

ASCの大きな柱である進路選択および修学相談業務は、総合入試学生の入学とともに平成23年4月から開始しました。開始早々から毎日大勢の学生が相談に訪れ、スタッフは総出で対応に大わらわというありさまでどうなることかと思われましたが、これは新学期開始時の履修システム、時間割作成等に関するテクニカルな相談がほとんどであり、4月下旬の履修登録期間の終了とともに、波が引いたように沈静化しました。その後は9月と2月の学部学科移行ガイダンス後に多少のにぎわいが見られるものの、ふだんは日に数名程度が種々の相談に訪れる程度で、平成23年度の延べ相談人数は446人でした(図1)。

このように純粋な進路選択に関する相談件数はそれほど多くはなく、これは年2回の学部学科紹介、総合講義「学問の世界」、各学部での個別ガイダンス、後述のアカデミック・マップ等による学部学科の情報提供が十分に機能していることによるものと思われる。ただし相談の中には志望変更(他系移行希望、転学部転学科)や将来の進路に関するものなどの確かなアドバイスを必要とするものもあり、他では得られない貴重な個別相談の場として機能しています。

## アカデミック・マップ

昨今の学問領域の多様化・融合化により、学部や学科の名称だけでは実際の教育・研究内容がイメー

ジしくなっています。薬に関する勉強がしたい、それなら薬学部に行くしかない、と短絡するのではなく、理・工・農・水など複数の学部で類似の研究がなされていることを知れば、学科選択の幅が広がり不本意な学科移行を少しでも減らすことにつながります。

総合入試学生への進路選択支援の目玉であるアカデミック・マップは、学問領域を28テーマ84分類に分けて関連する学科を配置した見取り図と、学部学科ごとに選定したキーワード一覧からなる小冊子です。web上には検索に便利なオンライン版も公開されています。冊子体は新入生へ配付するほか、入試相談会等での説明資料にも重宝されており、学外配付数は2,600部にもなります。また、オンライン版のアクセス数も平成24年6月までに16,000件に達しています。このような試みは他に例が少なく、他大学のみならず高校や予備校等の進路指導者にも注目されています。

## 学習サポート

ASCのもう一つの柱である学習サポートは、大学院生のチューターとASCスタッフによる学習指導です。総合入試開始に先立って平成22年1月からの試行を経て同年4月より正式に開始しました。初年度は場所が1階北側の少しわかりにくいところにあり、また周知が行き届かない面もありましたが、それでも年間延べ585人の利用がありました。2年目の平成23年4月からは総合入試の開始と

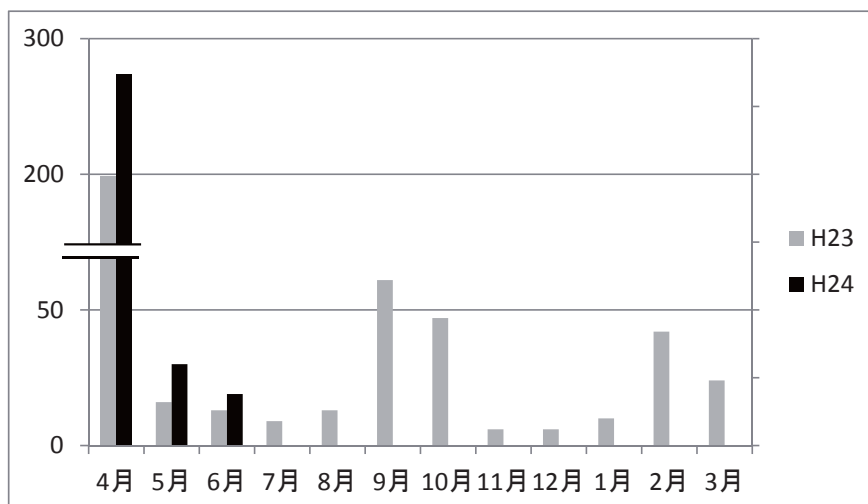


図1 進路修学相談件数の推移 (H23.4 ~ H24.6)

もに現在地に移転し、地の利がよくなったことと、総合入試学生の移行点向上を目指す勉強意欲の高さからか、年間利用者数が延べ2,228人と前年比380%の大きな伸びを示し、今年度はさらに増加傾向にあります(図2)。また併設している自習スペースの利用者も年間5,000人に達しています。

利用科目は数学、物理が中心で、この2科目で全体の約2/3を占めています。授業担当者に積極的な利用を呼びかけてもらう一方で、多く寄せられる質問内容をフィードバックすることにより、授業改善につなげる努力も行っています。特に試験前には盛況となるために、通常は午後のみを開室時間を午前中から夕方以降まで延長し、チューターを増員して対応しています。利用学生の満足度は97%を越え、リピーター率も高いことから、十二分に役割を果たしているといえます。

### スタディスキルセミナー

自由訪問型の学習サポートとは別に、特定のテーマを設定して時間限定のスキルセミナーの開催も平成22年度より行っています。1年生は履修科目が多く時間割がタイトなこと、また共通する空きコマがほとんどないことから開催時間の設定が難しく、当初は参加人数もそれほど多くありませんでしたが、3年目となった今年は同じメニューを一週間通して行う、18時以降の講義終了後にも開催する、などの工夫により参加者は延べ129人に増加しま

した。

テーマは、ノートの取り方、レポートの書き方など、通常の授業では教わらない学習スキルに関するもので、参加学生には大変好評でした。潜在的なニーズはまだあるとみられるので、開催方法の工夫等により今後も継続していく予定です。

### 今後に向けて

総合入試1年目とともにまずは順調な滑り出しをしたASCですが、現在の6名のスタッフはいずれも任期付きであり、3年を越えては雇用できないという制限があります。3年前の発足当時からすでに2名が入れ代わっており、今年度末にかけて残りの4名も交替予定です。北大の教育・研究はきわめて広範にわたり、また全学教育や学科移行のシステムは複雑です。それらに精通して学生に誤りなく対応するのは慣れないとなかなか大変です。相談事例の整理類型化、ノウハウの蓄積、諸データの分析等を通じて、より効率的に学生の相談に応じられる継続的な体制作りが求められています。

一方で、進路相談や学習サポートを経験した学生の高学年化によって、学部専門科目に関する質問や大学院進学相談なども増えてきました。留学生も含め、初年次生以外の学生への対応も検討課題です。今後の多様化するニーズへの対応はASCの限られたスタッフだけでは不可能であり、諸先生方のご協力・ご支援をよろしくお願い申し上げます。

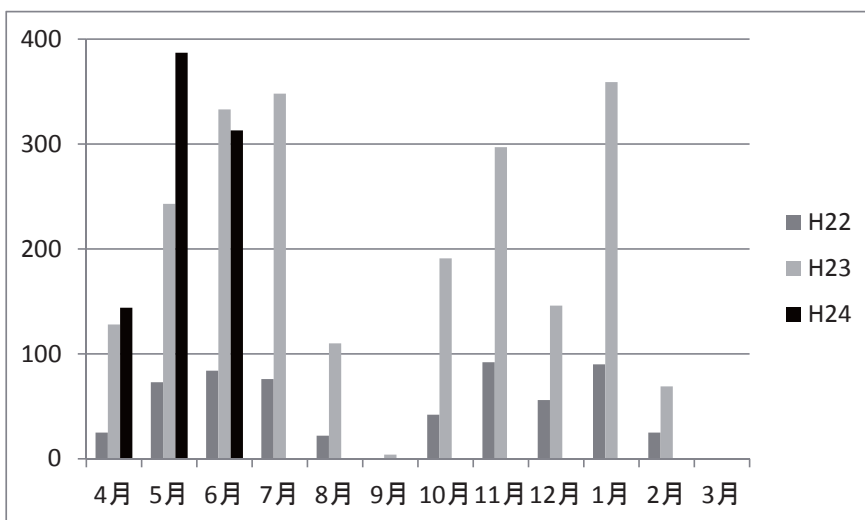


図2 学習相談件数の推移 (H22.4 ~ H24.6)

## \*\*\*教育総長賞受賞者の授業から\*\*\*

### 教育総長賞の理由 (わけ)

一般教育演習担当 農学部 准教授 川村 周三

2012年3月6日に北海道大学教育総長賞を拝受いたしました。

北大時報の平成24年(2012年)3月号によると、「この表彰は、教育活動及び研究活動を通し、優れた功績を上げた教員を顕彰することにより、教員の教育研究意欲の向上を図り、もって本学の活性化と更なる発展に資することを目的としたものです。」とされています。

この時、北大全学で教育総長賞は7名、研究総長賞は8名が受賞しました。なぜ、私が教育総長賞を受賞したのであるか？その理由(わけ)を考えると、私が担当している全学教育科目の一般教育演習(フレッシュマンセミナー)の「食べ物が食卓に届くまで」が思いあたりました。

「食べ物が食卓に届くまで」は、以下のような目的で授業のやり方に少し工夫を加えておこなっています。

私たちが毎日食べている食べ物、私たちが生きていく上で不可欠な食べ物が、生産地(農場)からどのようにして自分たちの手元(食卓)まで届けられているのかを知ることを授業の目的にしています。

毎回の授業ごとに、食べ物に関して1回で完結する内容をパワーポイントを使って話します。毎回の授業終了前に10分程度の時間をとり、出席票も兼ねた小テストをおこないます。小テストの問題は、その回の授業をしっかりと聞いていれば解答が書ける内容です。同時に、その回の授業に対する意見や疑問質問を書く欄もあります。疑問質問には、次回の授業の最初の時間を使って回答します。

授業の最後の3回は「自分たちで調べて自分たちで発表する」と題して、5~6人がグループで食べ物(食料)にかかわるテーマに関して調査研究を行い、パワーポイントを使って発表する時間になっています。この発表のために学生たちはかなりの時間をかけていると思います。その結果、すばらしい「力作」の発表が毎年あります。この研究発表のおかげ

で、文系や理系を超えた学生同士の友人関係も深まるようです。

わが国では、全人口の2%程度の300万人足らずの農家の人たちが、1億3千万人弱の人口の食料の40%程度(カロリーベース)を生産し、残りの食料(60%)を外国から輸入しています。私たちの大部分の人たちは、自分で食料を作っていないにもかかわらず、今のところ、毎日の食べ物には不自由しない(お金さえ出せば食べ物を買うことが出来る)生活を送っています。最終回の授業「自分たちの食べ物は自分たちで作る：日本の食料自給率」は、このようなわが国の食料生産の現状を知ってもらうためのテーマです。自分の国の食料生産の実情を知ってもらうことが「食べ物が食卓に届くまで」の授業の最大の目標です。

地震津波や台風などの自然災害で、電気・ガス・水道のライフラインが止まると、私たちは大変困ります。しかし、電気やガスの供給が1週間止まっても、不便な生活ではありますが、何とか生きていけます。ところが、水や食べ物の供給が1週間止まると我々はパニックになり、生きていけない人も出てきます。このように「食べ物が食卓に届くまで」のライフラインは、ほんとうの意味での「生命線」であることをこの授業の中で学生の皆さんが実感するよう願っています。

このような意図と目標でこの授業をやっていることを学生の皆さんが理解するおかげかと思いますが、毎年の学生による授業アンケートの評価も高く、学生の満足度も高いようです。学生の皆さんからのこのような評価のおかげで、私が教育総長賞をいただくことができたものと感謝しています。

## 京大型カード

スペイン語担当 国際本部 留学生センター 教授 山下 好孝

みなさんは「京大型カード」(写真1)という物を利用されたことはないでしょうか。別名「情報カード」ともいいます。京都大学出身の梅棹忠夫先生が提唱されたもので、私も中学校の時「知的生産の技術」という岩波新書を読んで知りました。フィールドワークでこのB6版のカードに思いついたこと、観察したことを一枚一項目に限定し書き入れ、研究室に戻ってからそれらをグループ分けして考察の材料にするのです。

この「知的生産の技術」を読んで、「京大型カード」を大量に買い込んだり、タイプライターの練習を始めた人が私の年代には多数いらっしゃるのではないかと思います。私もその一人です。「ひらがなタイプライター」はなかなか手に入りにくい物でしたが、ワードプロセッサの値段が20万円近くになると無理をして買いました。「京大型カード」の方ですが、私の場合、大学の卒業論文、大学院の修士論文を書くときに大変お世話になりました。メモを書き入れたカードが増えていく度に、研究が進んでいるのだと実感でき、後輩たちにも利用を薦めたものです。

しかし、大学院を修了し、別の分野の研究にも手を染め始めたころ、部屋に並んでいる記入済みの京大型カードが邪魔になってきました。違う分野のことをやり始めると、昔のカードは役に立たないのです。しかし捨てるのももったいなく、本棚の上のほうに長い間ホコリをかぶってカードは眠っていました。

そうこうするうちに語学教育でフラッシュカードというものがあることを知りました。発音練習など

でキューとなる語句をカードで示すのです。当初、B4版の画用紙などを買ってこのフラッシュカードを作っていたのですが、使わなくなった京大型カードを再利用することを思いつきました。細かい字で書かれたカード

の上から、太めのマーカーで語句を書き入れれば、新品を買う必要はありませんでした。B6なので小さすぎて学生には見えないかなと思ったのですが、漢字の二字熟語などはかなり遠くからでも判別できることが分かりました。

最初は外国人に対する日本語の授業で使っていたのですが、スペイン語などほかの外国語の授業でもたいへん重宝しています。テキストに書かれた練習問題では眠くなっても、フラッシュカードで提示される語句を追って変換練習などをしていくと、リズムが生まれて楽しいものです。

廃物利用から生まれた「京大型カード」の利用で、今年北海道大学教育総長賞をいただけたのではないかとも思っております。語学を担当されている先生方にぜひ利用をお勧めします。そして若かりしころ一生懸命書き入れた「京大型カード」を死蔵されている方々にはお願いです。いらなくなった京大型カードがあったらぜひお譲りください。活用させていただきます。

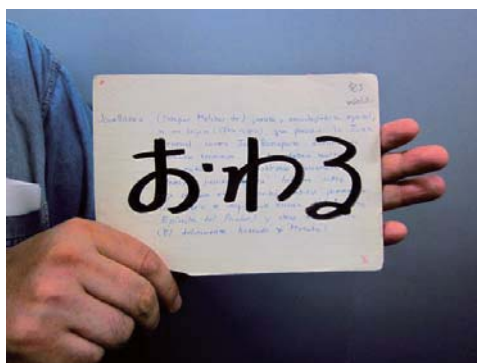


写真1 京大型カード

## 私の社会の認識「都市地理学入門」

社会の認識担当 文学研究科 教授 橋本 雄一

「わたし、気になります」と言わんばかりに好奇心に目を輝かせる学生達を前に、大きな声で気持ちよく話したいことを話す。そんな授業ができないものかと考えたのが20年前です。

私の専門は、都市地理学および地理情報科学であり、学生達の空間情報処理能力を向上させることを授業の目標にしています。この授業に、私は「いかに学生達を引きつける興味深いテーマを提示できるか」、「90分間、学生たちを退屈させないで授業を進められるか」、「授業終了時に学生達が満足できる結果を与えられるか」といった課題を持つてのぞんでいます。

例えば、テーマとしては北海道における医療空白地帯の問題など、身近にある深刻な社会問題を取り上げ、それを空間的側面から考える重要性を強調しています。授業中には、様々な動画資料を組み合わせて活用し、できる限り具体的な情報を見せるようにしています。その際に、私の学会発表で用いた

GIS（地理情報システム）による分析結果の動画資料も使い、最先端の技術を感じさせるような演出も行っています。

さらに、授業の終了直前には、90分間の内容をまとめ、それを個々人が生きていく上での社会的課題に結びつけることで、学んだ意義を確認するような事を行っています。

未だに20年前に夢見た理想の授業には到達できませんが、決めた方向に向かって最大限の努力をするつもりです。それによって、学生達の空間情報処理能力を向上させ、来るべき地理空間情報高度活用社会を担う人材を数多く育成していきたいと考えております。

写真1 授業の一環として行った公開セミナー

## アカデミック・サポートセンターの新メンバー紹介

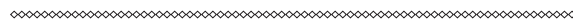
4月に特定専門職員（アカデミック・アナリスト）に着任しました大沼明と申します。3月までは本学触媒化学研究センターにおいて特任助教をしていました。本学大学院環境科学院環境物質科学専攻の出身であり、学位は博士（環境科学）です。専門はコロイド・界面化学です。環境・エネルギー問題の解決へとつながる新規な機能材料の開発とその実用化をめざし、微粒子の構造制御に関する研究をしています。

博士後期課程在学中には、米国の Washington University in St. Louis (Department of Biomedical Engineering) へ約1年半留学しました。英語力を高められたのはもちろんのこと、研究に没頭してナノテクノロジーについての知識と技術

を深めました。また、各国の人々との交流を通じて見分を深めることができました。

この度着任したアカデミック・サポートセンターでは、北大生への支援を通して、これまで学生および教員として数々の貴重な体験を私にもたらしてくれた北海道大学に貢献したいと考えています。どうぞよろしく願いいたします。

(大沼 明)



今年度より、アカデミック・サポートセンター(ASC)のスタッフになりました、多田泰紘と申します。ASCでは、ナビゲーターとして、主に学生の進路・修学相談を担当しています。

私は、大学、大学院と北海道大学で学び、今年3月に博士(理学)号を取得しました。博士課程では、理学院・自然史科学専攻の昆虫の進化や生態を扱う研究室に所属していました。私は、昆虫の1つのグループであるゾウムシを材料に、単為生殖の研究を行っていました。単為生殖とは、メスだけで産卵し、次の世代が生まれる繁殖方法ですが、ゾウムシ類における単為生殖の進化機構の解明を博士論文のメインテーマとしていました。

大学院卒業後、ASCのスタッフになってすぐの4月に、多くの学生さんが相談に来られ、驚きました。まだ不慣れな点も多く、対応に奮闘する毎日で

した。しかし、同時に後輩の相談相手になることができ、研究とは異なるやりがいを感じました。現在は、相談業務とともに、進路選択支援小冊子「アカデミック・マップ」の来年度版作成に向けて、データの更新と修正を行っています。また、大学・大学院で学んだ専門知識と経験を活かし、主に生物学の学習サポートも担当しています。まだまだ勉強不足ではありますが、精一杯、学生支援業務に努めていきたいと考えています。今後ともよろしく願いいたします。

(多田 泰紘)

## 学務委員会関係報告

### 学務委員会報告

平成 24 年 3 月 21 日（水）に平成 23 年第 5 回学務委員会，平成 24 年 6 月 5 日（金）に平成 24 年度第 1 回学務委員会が開催され，以下の議題について話し合いました。

### 平成 23 年度第 5 回学務委員会

#### 議題

1. 総合入試入学者の移行先の決定
2. 「北海道大学鈴木章科学奨励賞—自然科学実験—」被表彰者の選考
3. 学生の懲戒

### 総合入試入学者の移行先の決定

平成 23 年度総合入試入学者の各学部・学科への移行先の決定が了承されました。総合入試入学者文系 101 名，理系 1,077 名のうち，文系入学者 97 名，理系入学者 1,022 名が 2 年次への進級要件 32 単位を充たしました。最終的に文系入学者 97 名，理系入学者 1,015 名が 2 年次へ進級しました。

### 「北海道大学鈴木章科学奨励賞—自然科学実験—」受賞者の選考

本賞は，本学の全学教育科目の自然科学実験に

おいて，特に優秀な成績を修め，かつ本学の目指す全人教育の理念にふさわしい学生を表彰するものです。平成 23 年度は，第 1 学期 2 名，第 2 学期 4 名を受賞者として選考しました。平成 24 年 3 月 6 日に，鈴木章名誉教授の臨席のもと表彰式が執り行われました。

### 平成 24 年度第 1 回学務委員会

#### 議題

1. 専門委員会内規の一部改正

#### 報告事項

1. 平成 24 年度 1 年次学生の既修得単位認定結果
2. 総合入試入学者の移行先の決定
3. 平成 23 年度 1 年次学生の異動
4. 全学教育科目に係る授業アンケートの実施方法等

### 専門委員会内規の一部改正

平成 24 年度より学務部教務課に全学教育・総合教育推進室を設置したことに伴う内規の改正を行いました。

(山口 淳二 副機構長・理学研究院教授)



## 大学教育学会 第34回(2012年)大会開催される

表記大会が、5月26、27日に北海道大学高等教育推進機構において以下のスケジュールで開催されました。参加人数は603名(参加費納入者数内訳：事前申し込み415名、当日受付188名、他に北大学内参加者35名(無料))にのぼり、地方大会としてはきわめて参加者の多い大会となりました。

大会テーマ～転換期の大学教育～は、日本の大学の現状と東日本大震災、原発事故を受けて設定されました。本大会では、16題のラウンドテーブルと91題の自由研究発表がありました(表1)。

特別企画としては、北海道大学の特色を披露するために、1日目に鈴木章名誉教授にノーベル賞受賞に関わる研究とともに教育の特色について話していただきました(写真1)。2日目のシンポジウムⅠでは司会を佐藤浩章(愛媛大学)、安藤厚(北海道大学)両氏に依頼し、講演者の話だけではなく、参加者同士の議論なども組み込み活発な議論が展開されました。

平行して開催されたシンポジウムⅡでは、原発事故の調査に早期から関わってきた木村真三氏(獨協医科大学)が、住民教育の重要性や、各分野の専門家が自分の専門領域内で責任を持って情報提供す

ることの大切さを強調されました。市民の科学教育を支援する科学技術コミュニケーターの養成が、このような動きにいかに関わっていくかがポイントになることも示されました。

また、直近の話題として、2日目に緊急シンポジウム「大学への秋入学をめぐる」を設け、東京大学の鈴木敏之副理事から秋入学についての理念と今後について紹介していただきました。東京大学が導入を計画している総合的な教育改革の項目の一つが秋入学であることがよくわかりました。

本年が北大恵迪寮寮歌「都ぞ弥生」の発表100周年記念であるため、要旨集にその概要を収録するとともに、懇親会でも北大オーケストラの弦楽四重奏で演奏しました。また、初日の昼休みには、北大とロシア連邦北東連邦大学国際交流協定締結記念として歓迎コンサート「北の口琴—ムックリとホムス」も行われました。

理事会も含めると5月25日から3日間の開催で、大きな問題もなく実施できたのは会員各位ならびに実行委員会のご協力と、北海道大学のご理解の賜物です。お礼を申し上げます。

(企画委員長 細川 敏幸)

表1 大会スケジュール

第1日目 5月26日(土)
9:00～9:20 初めに参加する人のためのオリエンテーション
9:30～12:10 ラウンドテーブル
13:10～14:00 総会
14:10～14:20 開催校挨拶 北海道大学総長 佐伯 浩
14:20～15:20 基調講演 北海道大学名誉教授・ノーベル賞受賞者 鈴木 章
15:30～18:00 自由研究発表
第2日目 5月27日(日)
9:00～12:00 自由研究発表
13:10～15:00 ・シンポジウムⅠ：教育のアウトカムをどのように評価するか？ ・シンポジウムⅡ：転換期における科学リテラシー教育の課題
15:10～15:20 次期開催校挨拶(10分)
15:30～16:50 緊急シンポジウム「大学の秋期入学をめぐる」(80分)
16:50～17:00 閉会



写真1 鈴木名誉教授による基調講演

高等教育 HIGHER EDUCATION

総合教育の充実をめざして

～第20回北海道大学教育ワークショップ～

6月8～9日に第20回北海道大学教育ワークショップ「総合教育の充実をめざして」を開催しました。これは、ないえ温泉ホテル北乃湯にて一泊二日で行われる新任教員研修会です。今回は学内から32名が参加しました。

研修内容は例年通り、仮想的に考案した授業科目のシラバス作成を通して教育の基礎を学ぶというものです。大きく分けると「目標」「方略」「評価」の3セッションでそれぞれレクチャーとグループ討論を行います(表1)。特に今回は、評価を表として作成するようにし、到達目標が全て評価されているか、形成的評価を取り入れているか、タキシノミーの3領域を広くカバーしているかなどをチェックできるように改善しました。これによって評価の作成が、シラバス作成の総チェックとしての役割となり、どのグループも目標・方略に遡って積極的に修正を加えていました(表2)。

この研修会は、ほとんどの時間がグループ作業で、さまざまな部局から集まったメンバー同士の交流会的な雰囲気で行われました(写真1)。

今回、シラバス作成に向けたレクチャー以外では、本堂武夫副学長による挨拶、山口淳二総合教育部長による「北大の全学教育と総合入試」、岡部成玄情報基盤センター教授による「授業における著作権」(写真2)、そして今回初めて須佐大樹産学連携マネージャーによる「教育における知的財産の活用」が入りました。

今回の参加者アンケートによると満足であると回答した人は93.5%でした。また、この研修会の内容を越えた内容の研修会に参加したいと回答した人は80.6%と非常に高く、教員の教育への意識が高いことがわかりました。教育トレーニングの機会の拡大が臨まれます。(山田 邦雅)

表1 北大教育ワークショップのプログラム

2012年6月8日(金)		
8:25 受付 北大学術交流会館 第1会議室	16:40 グループ作業IIの課題の説明	
8:40 挨拶 本堂副学長	16:50 グループ作業II「授業の設計2:方略」	
8:55 バス出発 研修開始:オリエンテーション	17:50 発表・全体討論	
10:10 新しいえ温泉「ホテル北乃湯」到着	18:30 夕食	
10:20 ミニレクチャー「北大の全学教育と総合入試」	19:30 ミニレクチャー「教育における知的財産の活用」	
10:50 休憩(15分)	20:00 懇親会	
11:05 ミニレクチャー「授業における著作権」	2012年6月9日(土)	
11:35 ミニレクチャー「FDの目的と教育倫理」	7:30 朝食	
12:10 昼食	8:30 ミニレクチャー「教育評価」	
13:00 研修のオリエンテーション 「ワークショップとは」・アイスブレイキング	9:00 グループ作業IIIの課題の説明	
13:30 ミニレクチャー 「カリキュラムの構成要素とシラバス」「学習目標」	9:10 グループ作業III「授業の設計3:評価」	
14:00 グループ作業Iの課題の説明	10:10 発表・全体討論	
14:10 グループ作業I 「授業の設計1:科目名・目標の設定」	10:50 休憩	
15:10 発表・全体討論	11:00 修了証授与式	
15:50 休憩	11:15 参加者の個人的感想や意見	
16:10 ミニレクチャー「教育方略」	12:00 昼食	
	13:00 バス出発	
	14:30 JR札幌駅北口到着	



写真1 グループ討論



写真2 ミニレクチャーの様子

表2 各グループが作成したシラバスから ... 講義題目と目標

<p>&lt;グループ A&gt;一般教育演習  <b>【講義題目】</b> ヒグマの国へようこそ  <b>【一般目標】</b>          北大には文学、経済学、農学、理学、薬学、医学など文系、理系様々な学問分野がある。今後の50年を考えたときに私達は多くの問題に直面していることがわかる。例えば、エネルギー問題、環境破壊、少子高齢化、地域紛争などである。私達はこれらの問題に対処するために、これまで以上に多くの知識を集積し、解決する方法論を身につけなければならない。身の回りの生活にはこれらの学問分野が少なからず全て関わってくることから、私達の身近な存在であるヒグマから派生する様々な問題を考察し、解決する能力を身につけることを本授業の目標とする。  <b>【到達目標】</b>          ①ヒグマの生態を科学的に説明できる (認知)。          ②ヒグマの生態と人間との関わりを考察し説明できる (認知)。          ③ヒグマ牧場建設にあたり、マーケティング、リスクマネージメント等、経営計画を立てることができる (精神運動)。          ④ヒグマ牧場建設の是非について論理的に自分の考えを述べ、討論できる (情意)。          ⑤身近な問題を分析し、将来の諸問題における解決策を提案できる (認知, 情意, 精神運動)。</p>	<p>する考え方である。          本一般教育演習／フィールド体験型では自らがハンディキャップと介護を体験し、介護技術を習得する。その上で、現在の社会システムの現状を認識し、改善点を発見し、解決策を見出す能力を身につける。  <b>【行動目標】</b>          ①ハンディキャップを持った人へ思いやりを持って接することができる。          ②ハンディキャップを持った人にかかわる社会の仕組みについて説明できる。          ③都市部と地方、諸外国と日本のノーマライゼーションを対比し評価することができる。          ④基本的な介護技術を実践できる。          ⑤経験を通して問題点を見出し、社会問題を解決する建設的な意見をプレゼンテーション、レポートを通して提示できる。</p>
<p>&lt;グループ B&gt;一般教育演習  <b>【講義題目】</b> 北海道の食の魅力  <b>【一般目標】</b>          アイヌ民族から現在に至るまでの北海道の食を通じて          ①北海道の歴史を学ぶ          ②北海道の文化を学ぶ          ③北海道の経済を学ぶ          この演習を通じて北海道の食から見える〇をあらためて考えましょう  <b>【到達目標】</b>          ①アイヌ民族の食文化について説明できる (認知領域)          ②現在の北海道の食文化について説明できる          ③北海道の開拓と食の関連について説明できる          ④北海道の食材の生産と流通について説明できる          ⑤積極的に発言・討論ができる。(情意領域)          ⑥グループ・ディスカッションを通して、提示された複数の課題から一つを選択することができる (情意)          ⑦テーマに関連した資料を探してその資料を読解できる (精神運動領域)          ⑧資料に基づいて効果的なプレゼンテーションをすることができる</p>	<p>&lt;グループ D&gt;総合科目  <b>【講義題目】</b> 日本は世界で有数の地震国である。先の東北大震災では、甚大な被害が生じ、東北地方はもちろんのこと、全世界的な影響が危惧されている。そのため、様々な災害の危険性を理解し、その対処方を学ぶことは重要である。また、被災地の復興も最重要課題であり、様々な人々が復興に関わる仕事に関わっている。本講義を通して、災害の一般的な知識を学び、東北大震災からの復興の現状とその方策を考える。  <b>【到達目標】</b>          ①日本、北海道で起こりやすい災害を述べることができる          ②災害にあった時に適切に避難できる          ③災害でけがをしたときに適切に処置できる          ④災害と被害の数値化と統計的な分析ができる          ⑤災害にあった人の心理を説明できる          ⑥災害から生じるエネルギー・経済問題を分析できる          ⑦災害支援・復興支援に関わる仕事について説明できる          ⑧復興支援における北海道の役割を説明できる          ⑨災害に強い街づくりを提案できる</p>
<p>&lt;グループ C&gt;フィールド型一般教育演習  <b>【講義題目】</b> ノーマライゼーションへの扉  <b>【一般目標】</b> 急速な高齢社会が進んでいる我が国において、様々なハンディキャップを持っている人々が不自由さを実感しながら地域で生活している。ノーマライゼーションとは障害を持った人々を差別したり特別な人とみなさずに、その状態自体を通常と考え、ハンディキャップを持っていても普通に生活できる社会システムを構築</p>	<p>&lt;グループ E&gt;大学院共通科目  <b>【講義題目】</b> 複眼的な研究の進め方—環境問題を切り口として—  <b>【一般目標】</b> 理系・文系により研究の進め方は大きく異なる。これらの多面的な研究アプローチ法を、自然・人文全てに共通する“環境問題”をテーマにして学び、自らの研究の視野を広げることを目標とする。各分野を代表する6人の講師がそれぞれの研究分野について計12回の講演を行い、学生間のディスカッションを通し、問題の理解を深め論点を明確に把握する。また、学生による発表とそれに対する批評によって、表現力と分析力を養う。  <b>【到達目標】</b>          ①分野の違う環境問題6テーマについて300字で説明できる。          ②環境問題に対し問題点を明確に表現し、複数の解決策を提示する。          ③異分野の人に理解可能なプレゼンテーションができる。</p>

## Greetings from a new visiting professor

Hendrik Ferdinande, Visiting Professor from Ghent University, BE-9000 Gent, Belgium

It is a great honour for me to be invited as a visiting professor in the Higher Education Research Division at your Institute for the Advancement of Higher Education of Hokkaido University. I want to start with just a few Japanese expressions, which I learned from the first pages of the little booklet ‘Le japonais dans votre poche’ which I carry always with me. *Hendrik Ferdinande to mōshimasu. Watashi wa berugī-jin desu. Gent ni sunde imasu. Nanajūni-sai desu.* But now I am obliged to switch over to English quickly again.

I am a retired Associate Professor in the Department of Physics & Astronomy of Universiteit Gent/Ghent University, in Flanders - the Northern, Dutch-speaking community of Belgium/ ベルギー . My university has as credo “Dare to think,” similar to your university’s motto “Boys be ambitious” as Dr. William S. Clark expressed it. I have performed experimental low- and medium-energy nuclear physics research in Ghent and in the academic year 1973/74 at the NRC of Canada in Ottawa. During the last one and a half decade of my academic career, before my retirement, I started a thematic network of more than 150 European physics departments from some 33 European countries. This initiative resulted from the need to support the student mobility activities in those higher education institutions with the help of Erasmus, Tempus, Socrates and Life-Long Learning Programmes of the European Commission (E.C.). Already in 2000 this network joined the overarching network “Tuning Educational Structures in Europe” {co-ordinated by J. González [Universidad de Deusto, Bilbao (ES)] & R. Wagenaar [Rijksuniversiteit Groningen (NL)]}. The aims of ‘Tuning’ are equivalent with what Japanese would entitle as Faculty Development in the Asian jargon. ‘Tuning’ was also able to spread its mission to other continents [Russia, América Latina, Africa & even USA (Lumina Foundation)]. Tuning is a faculty-driven process that identifies what a student should know and be able to do in a chosen discipline when a degree has been earned. The process is designed to make HE outcomes more transparent to all stakeholders (students, employers, and parents) and to ensure the quality of degrees across institutions. I was the co-author & the editor of the EPS (European Physical Society) publications ‘European Specifications for University Level Physics Programmes,’ which provide a means to describe

the characteristics of the physics study programmes on a European level. This series of brochures covers the bachelor or first-cycle or EQF level 6, master or second-cycle or EQF level 7 and doctorate or third-cycle level or EQF level 8, as one of the three priorities in the Bologna Process. Very recently the China-EU High Level People-to-People Dialogue was launched in Brussels to strengthen co-operation in fields of education, youth, research and multilingualism. Commissioner Vassiliou stated: ‘We will expand the mobility of students, academics and researchers between the EU and China, and conduct an EU-China “Tuning” joint study in order to bring our higher education systems and institutions closer.’ I sincerely hope that a similar political action could take place between Japan and the EU, as was referred to recently by Dr. J. Witte (Bayerisches Staatsinstitut für Hochschulforschung und Hochschulplanung IHF, München) at the International Workshop “Bologna Process – From Europe to Israel and Back” in Jerusalem (IL) supported by the Konrad-Adenauer-Stiftung.

My stay is a real eye opener to for-me a quite distant and to-me an unknown part of the world. In this first week I have already been overwhelmed by the kindness, openness and helpfulness of the Japanese people and my colleagues in the university, for which I am very thankful. I am convinced that in the coming months I will enjoy learning a lot from the rich Japanese culture, as well as about the very able academic and educational knowledge present in Hokkaido University.

I post signed at the door of my office “Welcome, welkom, bienvenue, Willkommen, benvenuto” in the five languages I speak quite fluently. And I really mean it. What and whenever I can be of some assistance to you concerning European affairs, you should come to me and explain me your question. It would be a pleasure and honour for me helping you.

*Arigato gozaimasu!*

## 生涯学習 LIFELONG LEARNING

### 小学生対象のかけっこ教室「未来のアスリート目指して」開催

5月13日(日)に、北海道大学陸上競技場において北海道大学公開講座「未来のアスリート目指して」が開催されました。この教室は、昨年度より開催されており、小学校の運動会が集中する5月末～6月上旬を前に、かけっこで速く走るコツを小学生低学年対象に講習を行っています。今年度は申込期間に新聞で取り上げられたこともあり、募集20名に対して100名を超す応募がありました。そこで、急遽補助の学生を大幅に増やし51名の参加で行いました。

当日は天候にも恵まれ、ウォーミングアップと

しての鬼ごっこに始まり、走り方の講習、スタートの練習などを行い、50m走のタイムを計った後に最後には全員でリレーを走りました。陸上競技部員の補助も適切に行われ、50m走では「速くなった！」との声も聞かれました。

北海道大学でこのような公開講座を開催することは珍しいらしく、いくつかの報道機関も取材に訪れ、後日ニュースなどにおいて報道されました。注目度も高いことから、来年度以降も継続して行う予定にしています。

(瀧澤 一騎)



写真1 スタート練習



写真2 鬼ごっこでのウォーミングアップ

## 平成 24 年度全学インターンシップ始まる

平成 24 年度全学インターンシップがスタートしました。現在、夏休みの実習に向けて、説明会、学生と企業の希望のマッチング、事前研修などを行っています。

4 月 11 日及び 13 日に「平成 24 年度全学インターンシップ説明会」を開催し、両日に全学の学部生、大学院生約 470 名の参加がありました。これは前年度の 155 名を大幅に上回っています。なお、11 日は、インターネット回線を活用し、函館キャンパスとも双方向の説明会としました（参加者 38 名）。

今年度の説明会においては、昨年度に全学インターンシップに参加した伊藤可奈子さん(生命科学院修士 2 年)、樋田翔吾さん(農学部 4 年)、坂田大知さん(経済学研究科修士 2 年)及び前野翔平さん(工学部 4 年) からそれぞれ体験談を発表していただき、今年度の参加希望者に対する参加意欲の向上を図りました。その後、全学インターンシップの担

当者である、生涯学習計画研究部門亀野准教授及びキャリアセンター高橋インターンシップマネージャーから制度の説明や具体的な手続きの説明がありました。

また、5～7 月にかけて、参加希望学生と企業等のマッチングを行い、7 月 18 日現在 179 名の参加が決定しています。この人数も昨年度の最終参加人数 131 名をすでに大幅に上回っています。参加が決まった学生に対しては 6 月 27 日、29 日、7 月 4 日、6 日に講義形式の事前研修を実施し、その後、1 名 10 分あたりの個人面談も実施しています。これらの事前研修、個人面談はインターンシップ実習の効果がより高まるよう実施しているものであり、これらを経て、参加学生はそれぞれの企業・団体で夏期休暇にインターンシップ実習を行う予定です。  
(亀野 淳)

## スポーツトレーニングセンターの年間利用者初の 3 万人超え

スポーツトレーニングセンターの利用者はここ数年で増加しており、2010 年度は 1988 年以来 22 年ぶりに年間利用者が 2 万人を超えました。利用者はさらに増加しており、2011 年度はトレーニングセンター開設以来初の延べ 3 万人を超える利用がありました(前年比 129%)。

今年度から全学教育の授業が 6 限まで行われることから、放課後に利用できる時間が短縮します。そこで、1 月より朝 7 時からの早朝開場を実施しており(2011 年 12 月までは 9 時開場)、4 月以降も継続して行っています。

スポーツトレーニングセンター利用者の増加は、

サークル・部活動の学生だけでなく個人利用学生や教職員の利用者も増えていることによります。学生や教職員の健康維持・管理や、サークル・部活動の競技力向上に役立つ施設であるために、スポーツトレーニングセンター機器充実を図っています。また、利用者への情報提供を増やすために、2012 年 4 月にスポーツトレーニングセンターのホームページを開設しました。

<http://life1.high.hokudai.ac.jp/sports/>

これからもスポーツトレーニングセンターの積極的な利用をよろしく願います。

(瀧澤 一騎)

表 1 2011 年度におけるスポーツトレーニングセンター利用者数

期間	内訳	2011 年度	2010 年度	2011 年度/2010 年度比
小計	サークル・クラブ団体	25,142	18,254	+6,888 (138%)
	個人利用学生	6,245	6,188	+57 (101%)
	教職員	434	253	+181 (172%)
合計	—	31,821	24,695	+7,126 (129%)

## 北大生のキャリア意識に関するアンケート調査 ～大学生活と「働くことの意義」に着目して～

キャリア教育支援室では、大学入学後の早い段階の初年次学生に対して、「北大生のキャリア意識に関するアンケート調査」を実施しました。この調査は、全学教育・外国語教育（英語科目）を受講しているすべての1年生（現在3年生）を対象（2,410名の内、901部回収（回収率37.4%））に、2011年1月17日～31日に行いました。主な結果は以下のとおりです。

図1の学生の「働くことに対する積極性」の度合いと、図2の「働くことについて」の性別比較、図3

の働くことに対する積極性と「学生生活全般の満足度」との関連性、図4の「進路の明確性」についての結果をみると、次のような結果が示されました。

図1の縦軸の値が大きいほど、前向きに働きたいと学生が考えていることを意味しますが、最も積極性の高い数字を選んだ学生は52.4%、その次に高い値を選んだ学生は27%と、大部分の学生は働くことに対して前向きに考えていることが分かります。

図2の男女性別での比較では、男子学生で48.4%、女子学生で60.2%となり、女性の方が働くことに対

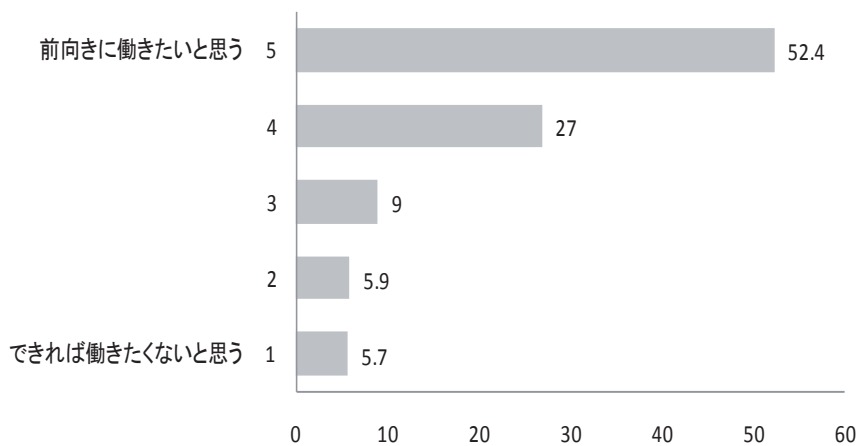


図1 働くことについてどのように考えるか

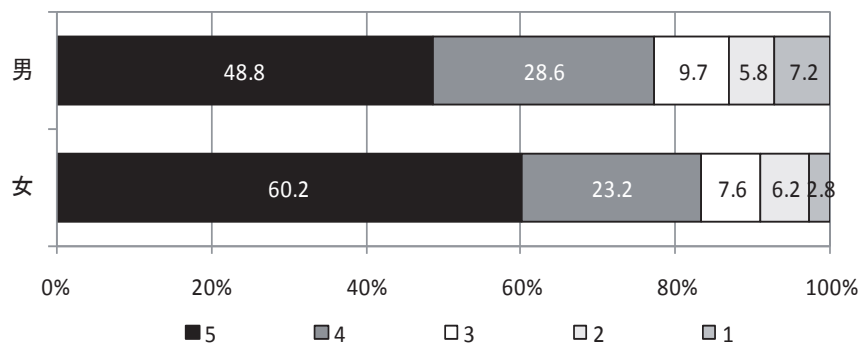


図2 性別による比較

して前向きに考えている傾向が見られました。

図3の学生生活全般に対する満足度では、働くことに対する積極性が高いグループ(3~5)の方が低いグループ(1~2)よりも満足度が高いことが見て取れます。

図4では、働くことに対して前向きなイメージを持つほど、学部卒業後の進路や職業について明確

な希望を持つ傾向が見られています。前向きに働きたいという意識が最も高い学生(積極性の度合いが5)は、「はっきりとした進路や職業の希望を持っている」と答えた学生が22.2%、「ある程度確かな進路や職業の希望を持っている」と答えた学生が34.4%となっており、両者を合わせて56.6%となっています。(宋美蘭)

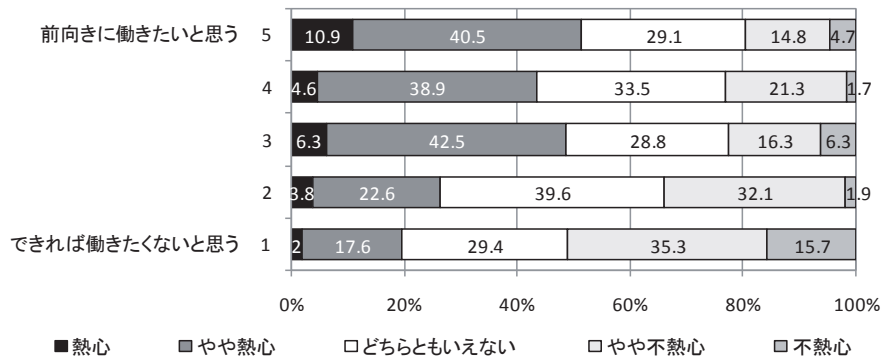


図3 授業に対する熱心度

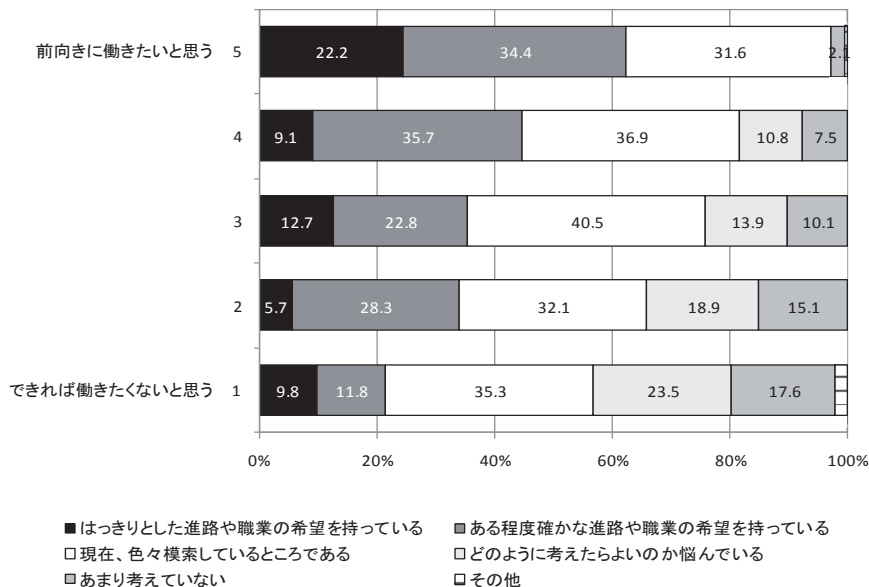


図4 働くことへの積極性と進路の明確性との関連



## 特別講義「大学と社会」終了

全学教育の特別講義「大学と社会」を開講し、終了しました。

本講義は、平成10年度より学部1年生を対象としたキャリア教育の一環として開講しています。社会の第一線で活躍する本学の卒業生が後輩にあたる主に1年生を対象に、学生時代から現在までの体験談を中心にお話をいただき、受講生である学生は、これらの講義を通じて、大学生活のあり方や将来のキャリアについて考える能力を育成することを目的としています。

今年度は、表1のとおり、10人の卒業生に講師としてお話をいただきました。多くの方々が卒業生ならではの熱いメッセージを後輩たちに送っていただきました。

1年生を中心に約130人の学生が受講しました。今年度は昨年度よりも受講者数が少なくなりましたが、質疑応答では、時間が足りなくなるほど数多くの質問が出るなど充実した授業内容となりました。

(亀野 淳)

表1 平成24年度「大学と社会」スケジュール

日程	講師 (敬称略)	出身学部
4月12日	○ガイダンス	
4月19日	○本授業の意義など	
4月26日	岩井 尚人 一般社団法人プロジェクトデザインセンター専務理事, 株式会社 iepo 代表取締役	経済学部卒
5月10日	山口 高明 財団法人日本気象協会 事業本部 環境事業部 地球環境課	農学部卒
5月17日	西 剛秀 第一三共株式会社 機能分子第一研究所	薬学部卒
5月24日	大佐賀 南 中部日本放送 報道・番組総局 報道・制作センター報道部 記者	地球環境科学研究科卒
5月31日	井谷 秀朗 皓歯会豊水歯科歯科医	歯学部卒
6月14日	○中間まとめ	
6月21日	赤松 俊理 NHK アナウンサー	文学部卒
6月28日	小松 研吾 株式会社ニュートンプレス 編集部	理学部卒
7月 5日	大川 直治 大川建築都市設計研究所 代表	工学部卒
7月12日	田中 里沙 地方公共団体金融機構資金部資金課主査	法学部卒
7月19日	半谷 いづみ 大塚製薬株式会社 製品技術第一研究所	水産学部卒
7月26日	○最終まとめ	

教育支援 EDUCATIONAL SUPPORT

## 2012 年度第 1 学期 アカデミック・サポートセンター活動報告

アカデミック・サポートセンター(ASC)の2012年度第1学期の活動を報告します。データは1学期の授業の終る8月3日までのものです。

スタッフと大学院生チューターによる学習サポート(写真1)の利用人数は延べ1,460人でした。利用人数は前年同時期と比べると1.3倍に増加しました(表1)。昨年度に比べ物理に関する質問が増加しています。スタッフによる進路相談の利用人数は延べ351人で、前年同時期と比べると1.5倍に増加しました(表2)。4月だけで274人の利用があり、履修

関係の相談が多く寄せられました。また、昨年度に比べると総合文系の学生の相談が増加しています。ASCにより開催されたスタディ・スキルセミナー(4月23日～5月25日)の参加者数は延べ129人でした。参加者数は昨年度第1学期と比べると1.9倍に増加しました。

第2学期も学習サポートや進路相談などの学生支援活動を行いますので、皆様のご協力をお願いいたします。(前田 展希)

表1 第1学期 学習サポートの利用状況

	利用人数		利用時間 (h)	1年生				2年生 以上	学年 不明
	H24年度	(H23年度)		総合入試		総合入試以外			
				文系	理系	文系	理系		
計	1,460	(1,161)	917	13	948	35	223	136	105

表2 第1学期 進路相談の利用状況

	相談人数		相談時間 (h)	総合入試		学部別	その他・不明
	H24年度	(H23年度)		文系	理系		
計	351	(242)	134	30	208	72	41



写真1 学習サポート室の様子

## 日誌 EVENTS, March-June

### 3月

- 5日・(会議) クラス担任幹事会
- 6日・(会議) 入学者選抜委員会
- 7日・(会議) 第64回教務委員会
- 8日・(行事) 一般入試(前期日程)合格者発表,  
私費外国人留学生入試合格者発表
- 9日・(会議) 総合教育移行専門委員会
- 12日・(試験) 一般入試(後期日程)
- 14日・(会議) クラス担任等連絡会
- 16日・(会議) 総合教育移行専門委員会
- 21日・(会議) 総合教育移行専門委員会  
・(会議) 平成23年度第5回高等教育推進機構学務委員会  
・(会議) 入学者選抜委員会  
・(行事) 一般入試(後期日程)合格者発表
- 22日・(行事) 学位記授与式(札幌キャンパス)
- 23日・(行事) 学位記授与式(函館キャンパス)
- 29日・(会議) 平成23年度第10回教育改革室会議  
・(会議) 平成23年度第5回学生委員会

### 4月

- 4日・(行事) 全学TA研修会
- 5日・(行事) 新入生オリエンテーション, 総合教育部ガイダンス
- 6日・(行事) 入学式
- 10日・全学教育部 第1学期授業開始日
- 26日・(会議) 平成24年度第1回教育改革室会議

### 5月

- 1日・(会議) 平成24年度第1回学生委員会

- 15日・(会議) 入学者選抜委員会
- 24日~25日  
・(会議) 平成24年度国立大学教養教育実施組織会議(千葉)
- 31日・(会議) 平成24年度第2回教育改革室会議  
・(会議) 平成24年度第2回学生委員会
- 31日~6月1日  
・(会議) 平成24年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会(岡山)

### 6月

- 5日・(会議) 第65回教務委員会  
・(会議) 平成24年度第1回高等教育推進機構学務委員会
- 8日~9日  
・(研修) 教育ワークショップ(奈井江)
- 13日・(会議) 全学教育科目責任者会議(総合科目(学問の世界))
- 18日・(行事) 北海道11国公立大学進学コンソーシアム2012 in 函館
- 19日・(会議) 平成24年度第1回全学教育専門委員会
- 20日・(会議) 全学教育科目責任者会議(文系基礎科目)
- 25日・(会議) 全学教育科目責任者会議(理系基礎科目)
- 26日・(会議) 成績評価結果検討専門部会
- 27日・平成24年度AO入試・帰国子女入試学生募集要項公表
- 28日・(会議) 平成24年度第3回学生委員会
- 28日・(会議) 平成24年度第3回教育改革室会議

## 行事予定 SCHEDULE, August-October

### ◆8月

- 1(水) 月曜日の授業を行う日及び月曜日の授業終了日
- 2(木) 木曜日の授業終了日
- 3(金) 金曜日の授業終了日(第1学期授業終了日)
- 5(日)~6(月)  
オープンキャンパス
- 6(月)~9月26日(水)  
夏季休業日
- 7(火) 成績報告締切(非常勤[帳票])
- 13(月)正午 成績報告締切(常勤[Web入力])
- 20(月) 平成18~24年度入学者の全学教育科目成績Web上公開
- 20(月)~21(火)  
全学教育科目成績確認及び成績評価に関する申立て期間
- 20(月)~9月26日(水)  
自由設計科目登録変更期間

### ◆9月

- 上旬~中旬 学科等分属手続:当該学部(2年次以上)
- 25(火)~26(水)  
学部・学科等移行ガイダンス, 学部・学科等紹介
- 27(木) 第2学期授業開始日
- 27(木)~10月3日(水)  
学部・学科等移行手続き(予備志望調査)
- 27(木)~10月3日(水)  
抽選科目の申込期間(Web入力)

### ◆10月

- 5(金) 抽選科目の結果発表日及び追加申込日
- 9(火)~15(月)  
平成18~24年度入学者履修届Web入力
- 9(火), 10(水)  
平成17年度以前入学者履修届受付

**ニュースレター 2012, No.91 目次**

＜巻頭言＞アカデミック・サポートセンターの3年間 川端 潤..... 1	小学生対象のかけっこ教室「未来のアスリート目指して」開催 ..... 13
***教育総長賞受賞者の授業から*** 教育総長賞の理由（わけ） 川村 周三 ..... 4 京大カード 山下 好孝 ..... 5 私の社会の認識「都市地理学入門」 橋本 雄一 ..... 6	平成 24 年度全学インターンシップ始まる ..... 14 スポーツトレーニングセンターの年間利用者初の 3 万人超え ..... 14 北大生のキャリア意識に関するアンケート調査 ～大学生活と「働くことの意義」に着目して～ ..... 15
アカデミック・サポートセンターの新メンバー紹介 ..... 7	特別講義「大学と社会」終了..... 17
学務委員会関係報告..... 8	2012 年度第 1 学期 アカデミック・サポートセンター 活動報告 ..... 18
大学教育学会 第 34 回(2012 年)大会開催される.. 9	日誌・行事予定 ..... 19
総合教育の充実をめざして ～第 20 回北海道大学教育ワークショップ～ ..... 10	目次・編集後記 ..... 20
Greetings from a new visiting professor Hendrik Ferdinande..... 12	

**編集後記**

ここ二ヶ月は曲芸師のようだった。単著・共著合わせて 5 冊の本に追い回されたからだ。いい歳をして初めて逃げ出したくなった。

最も大変だったのは、高等学校の教科書の指導書だ。来年採用されるそれは、内容が大きく変化し高度だ。先端の学問の基礎となる内容が高校生に必要という判断だ。

最近日本近海が騒がしい。外交は一朝一夕には行かぬ様々な力学が働く。それを機能させるには、明確な理念が必要だ。それなくして外交などあり得ない。

教育もまたしかり。その教科を通してどのような人材を育成すべきか、その明確な理念が必要となる。この教科書で学んだ生徒が、将来どのような姿になっていくのだろうか、様々な思いをはせながらペンを握る日々だった。 (うさぎ)

**ニュースレター (旧「センターニュース」)**

(北海道大学高等教育推進機構広報誌)  
**通算 第 91 号**

発行日： 2012 年 8 月 10 日  
発行元： 北海道大学高等教育推進機構  
(旧高等教育機能開発総合センター)  
〒 060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目  
電話 (011) 706-7520・FAX (011) 706-7854  
編集委員： ◎細川敏幸・山田邦雅・木村純  
亀野淳・三上直之・瀧澤一騎  
山岸みどり・鈴木誠・池田文人  
ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで  
電話：(011) 706-7514;FAX (011) 706-7521  
インターネットホームページ：  
<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html>